

寺 泊 り

文永八年十月十日、大聖人は佐渡に向つて神奈川県の依智を出発した。

では、竜口法難の翌日たる九月十三日の午後、北条時宗から「この人はとがなき人なり、今しばらくありて、ゆるさせ給うべし。あやまちしては後悔あるべし」との至急使が、わざわざ鎌倉幕府から届いたにもかかわらず、何故この処置となつたのであろうか。

時宗は文永五年十八歳で執権職となり、この年二十一歳であつた。九月十三日の立文から判断すれば、北条時宗が、大聖人に好意を持ったことは事実である。なにはともあれ、大聖人の予言のごとく国情が動き、大聖人の予言のごとく、蒙古襲来は事実となり、ただいつのいつかに襲来するかの問題となつたのである。

念仏宗禅宗を支持する方面からの意見をいれて、竜の口の処刑を黙許してみても、これが斬首出来ぬという不思議な僧侶である。時宗の心中は動揺したに違いない。しかもその目、大聖人の予言を裏づけるかのごとく、時宗は九州に、蒙古征伐の軍勢を動かしておるのである。

これでは、青年宰相としての正義感から、「この人はとがなき人なり、今しばらくありてゆるさせ給うべし」という立文を出さざるを得なかったであろう。時宗が大聖人を尊敬しておったことは後年、大聖人が佐渡赦免となったとき、道中の町重なる警護や、三月に赦免して鎌倉に到着すると、早々の四月八日の日に、大聖人を幕府に召して、蒙古襲来についての意見をきいたことによっても証明せられるのである。だが、時宗は大聖人を遇するにかくのごとくであつたのに、何故辺地佐渡の流罪となつたのであろうか。

先ず第一に考えられるのは、大聖人の預り人となつた武蔵守宣時である。この時、宣時は三十歳歳の働き盛りである。

この人は後年連署にもなつた程の人であるから、北条家における勢力の程も察せられる。しかも宣時は父子して、良観の師匠である叡尊から、戒を授けられた程の良観びいきである。なんで大聖人を許す筈があろう。大聖人が佐渡在島中には、三度も、偽りの命令書御教書を発して大聖人を苦しめたのも、この宣時であることを思えば充分にうなずけるのである。

次ぎは大聖人を召し捕りに向つた平左衛門尉頼綱である。頼綱は、大聖人より「貴殿は天下の棟梁、万民の手足たり」と評されたくらいに権勢の人、執権職の執事である。事実その権力は政治司法の政所執事二階堂氏や、問註所の執事太田氏よりは強大であつた北条氏の執事として兵馬警察の権を司つていたのである。頼綱は、時頼、時宗、貞時三代、三十余年執事の職にあつて、

終りには、自分の子供を將軍にしようとまでのぼりつめ、遂に貞時に父子とも誅せられたのは有名な話である。まあそのくらい権勢のある頼綱である。時宗が出した大聖人の赦免をとり消すぐらいのことはしたであろう。

第三には時宗の母である。時頼の奥方であつたに違いない。時宗の母は良親が住職しておるところの極楽寺を建立した北条重時の娘であることを忘れてはならない。北条重時は、その子の長時とともに、大聖人を伊豆の伊東に流罪した張本人であることを忘れてはならない。大聖人が竜の口において処刑になる理由の一つに、北条時頼が地獄に堕ちておるといふことを問註所において取り消さなかつたことにもよるのである。大聖人は問註所において四箇の格言を取り消さなかつた。時頼が地獄に堕ちておるといふことは、時頼が死んでからいつたのではなく、生きておるうちから申し上げましたとさえ、問註所で申し述べられておるのである。このことを聴いて、時頼の夫人たる時宗の母がだまつておる筈がないのである。時宗が、いかに大聖人の蒙古襲来の予言は、事実は的中しておるのです、大聖人の言葉の通り、ただ今、軍勢は九州に向つて出兵しております。世にも不思議な仏力をそなえた日蓮聖人ですと、母に申し上げても、おそらく、それとこれとは話が違ふ。父が地獄におちているといわれて、ほつておく程あなたは親不孝かと、母からいわれたならば、時宗も抗弁のしようがなかつたであろう。

ここで一寸鎌倉時代の女性というものにふれておいても無駄ではない。大聖人の流罪死罪等に

ついでどの伝記も、北条家の奥方が、念仏禪宗等々の僧侶に加担して大聖人を処罰するということが書かれてあるが、事実であつたらうか。それについては、鎌倉時代の女性は有名な尼將軍、北条政子が範をたれたごとく、女性の地位は思つたよりも高く、男となら異なることがなかつたことを知らねばならない。娘も兄弟とともに父の財産相続をうけ、娘は結婚のときもその財産をもつて行くことができた。ただし娘の所領は本人かぎり死ねば生家にとりもどされはしたが、今から考えると江戸時代と大變に違ふのである。所領をもつた女性は、男子同様に幕府の地頭、御家人として武士の待遇を受けるとともに、兵役にも従つた。木曾義仲の愛人巴御前や板額武勇伝は有名な話である。阿仏尼は四か年も鎌倉に滞在して、土地の争いの訴訟をした。また結婚も離別も比較的自由であつたといふことで、なかなか、女権の強い時代で、女人入眼の世と批評された時代である。以上のような時代であつたから、時宗の母たる最明寺の後家尼御前の、わが子時宗に対する威圧はなみなみならぬものがあつたと察せられるのである。

以上の三人に関連したのは、もちろん、良観を始めとする鎌倉寺々の僧侶であり、念仏、禪宗等々の信者が、大聖人さまの死罪、流罪の猛運動をしたことはうなずける。

時宗の胆、甕のごとしとは詩吟の文句であるが、こと大聖人に関しては、やはり、時宗も側近の言葉に支配されざるを得なかつた。

十月十日依智を立つて、佐渡に向われた日に大聖人は、故郷の清澄山の昔の兄弟弟子に手紙を

書かれて、その決心の程を示されておる。

「九月十二日に御勘氣を蒙て、今年十月十日佐渡の国へゆきます。学問するということは、仏教をきわめて仏になり、恩ある人を助けんとすることです。その仏になる道は、必ず身命をすてる程のことがあつて、はじめて仏になると考えられます。經文には「悪口罵詈される。刀杖の難に逢う。他人から瓦や石を投げられる。度々所を追われる」と説かれてありますが、日蓮はそのような難にあつたので、自分こそ法華經を身に読むものと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく、死んだ後には必ず各々を助けてあげます。インドでは師子尊者と申す人はダンミラ王に頸をはねられ、提婆菩薩は外道につきころされ、支那では竺道生と申す人は蘇山に流され、法道三蔵は顔に焼印をおされて、江南というところに流されましたが、これは皆法華經のためであり、仏法のためであります。日蓮は日本国東夷東条安房国の海辺の漁師の子であります。いたずらに死に果てる身を、法華經のためにすてることは、石と黄金とをかえるようなものでありますから、清澄山の人々はなげかないで下さい。私の師匠の道善房にも以上のように申しあげて下さい。日蓮の両鋸が世話になつた東条の領主の後家尼にも手紙を差し上げようと思つたが、佐渡に流されるというような身の上であるから、格別なつかしいとも思つてはくれないであらうと申しとおつたと、ついでに、あなた方からお伝え下さい。」

遠隔の地に旅立つ時、誰しも故郷を思わぬ者はおるまい。大聖人さまが佐渡流罪ときまり、そ

の出発の日に、故郷、清澄寺の人々にお手紙をした御心境は充分にうなずけられるものがある。この文中の後家尼というのは大聖人さまが佐渡から赦免になると、又信心するといった型の人である。後年信心を再び始め、大聖人さまに御本尊の下附をお願いしたが「日蓮が重恩の人なれば、たすけたてまつらなために、この御本尊わたし奉つるならば、十羅刹さだめて、へんばの法師とおぼしめされなん」といつて、この後家尼には御本尊下附を、大聖人はなされなかつた。十月十日は埼玉県の久米河、十一日は新倉、十三日児玉、十四日上野栗津等々、信濃路をへて十月二十一日、越後の寺泊りに着かれた。

寺泊りまでは、大聖人を見送る人が七、八人おった。その中に富木入道の家臣で、心ききたる入道が大聖人のお伴をした。その入道が帰る時、富木入道にあてたのが、寺泊御書である。

その寺泊御書は

「今月（十月）十日相州愛甲郡依智の郷をたつて、武蔵国久目河につき、十二日の旅をして、越後の国寺泊りの港についた。これより大海を渡つて佐渡の国に行こうというのだが、順風が定まらず、いつ渡海という日もさだまらないままに寺泊に逗留しておる。相州の依智からここ寺泊迄の道中は、想像も及ばない程の困難な旅であつて、とても筆にすることが出来ないから、御推量にまかせる。然し乍ら、何事も元より覚悟の上のことなので、今更歎くべきではないからやめておく……」（全集九五ページ）

と始まつて、直ちに御法門に入つて、最後に折伏の正義を述べられておる。その文中に、

「或る人、日蓮を難じて曰く、機を知らずしてあらぎを立て難にあうと」

——日蓮は相手の理解もかまわず、あらあらしく折伏をするから余計な難に逢うのである——

「或る人曰く、勸持品の如きは、深位の菩薩の義なり、安樂行品に違すと」

——日蓮は法華經の勸持品を行ずるといつておるが、觀持品に説くところの折伏の修行は位の進んだ菩薩のすることで日蓮のような修行の浅い初心の者は、法華經を修行するというても、安樂行品に説かれてある、消極的な布教方法即ち摂受の修行をすべきであるのに、日蓮はそのことを知らない——

「或る人曰く、我れ此の義を存すれども言わずと云々」

——第三の人はいう、自分も内心では、折伏の義は知っておるけれど、いわないのである——

「或る人曰く、唯教門ばかりなりと」

——第四の人は、日蓮の折伏の法門は、ただ教相の差別の一面のみにとらわれて、觀心門の平等という面からみれば、最後の悟りは同一であるということに無知だと非難する——

と四種類の大聖人への非難をあげておるがその非難を、大聖人は、法華經の行者として、勸持品に曰く「諸々の無智の人あつて、悪口罵詈す」日蓮この經文に当れり、及び刀杖を加うる者あらん日蓮この經文を読めり、「悪口してひんしゆくし、しばしば擯出せられん。数々とは度々なり、日蓮擯出度々、流罪は二度なり」といつて大聖人の心境を語られておるのである。

大聖人が佐渡に着かれたのは十二月二十八日であつた。

